

見性成仏説と宝性論

古 賀 英 彦

一

仏性という概念に対して、「仏になる可能性」という定義を最初に与えたのは、横超慧日氏であるらしい。涅槃經への入門書として書かれた『涅槃經』——如来常住と悉有仏性——という著作に於いてだが、名著と謳われるだけにその功罪は大きいと言わねばならない。その二二三頁に、

仏性というのはつまり仏になる可能性という意味を出ない。

と言う。一方で氏は既に一一一頁に於いて次のように述べている、

如来性とは如来の本性であって即ち如来の如来たる所以である。仏性というも同じであって、涅槃經の中では通常仏性と称されている。

つまり、仏性とは「仏の仏たる所以」であると定義されているのである。いま二つの定義を単純につき合わせて見ると、「仏の仏たる所以」は「仏になる可能性」に過ぎない、ということになる。「可能性」であるからそれを「所以」とする仏は未だ作仏していないわけである。つまり横超氏は仏陀が覚者であることを否定していることになる。もし

実際にそうだとしたら常識外である。そんなことはあり得まい。

私が読んでいるのは新版（一九八一年七月二〇日、サーラ叢書26、平楽寺書店）であるが、その序文に「敢えて補筆することなく旧稿のまま再版することにした」とあり、この矛盾に気付いている様子はまったくなくない。ということは、仏性とは「仏の仏たる所以」であることには異論はないから、「仏になる可能性」ということは文字通りの意味ではなくて、別の事を言おうとしているのではないか。つまりほかの事柄についての舌足らずな言い方なのではないか。そう思わせる節がある。詳しく引用して見よう。

一切衆生悉有仏性とはいかなる意味かといえば、別に何か仏性と称する実体的なものを何人もみな身中に保有するということの意味では勿論ない。要するにそれは何人も必ず皆仏と成り得るという意味に外ならぬ。すなわち現在は未だ仏ではないが、将来にはきつと仏になることが可能であるという点で悉有仏性といったのに過ぎぬから、仏性というのはつまり仏になる可能性という意味を出さない。

これは師子吼菩薩品の次の件りを踏まえた議論であろうかと思われる。（大12―五二―四b）
 仏陀が「仏なる者は即ち是れ仏性なり。何を以ての故ぞ。一切諸仏は此れを以て性と為せばなり」と言ったのに対して、

爾の時師子吼菩薩摩訶薩は、仏に白して曰く、世尊よ、若し仏と仏性とに差別無くんば、一切衆生は何ぞ修道を用いん。

仏言く、善男子よ、汝の問う所の如きは是の義然らず。仏と仏性とに差別無しと雖も、然れども諸の衆生は未だ具足せず。善男子よ、譬えば人有りて悪心もて母を害するが如し。害し已つて悔いを生じ、三業は善なりと雖も、是の人は故より地獄人と名づくるなり。何を以ての故ぞ。是の人は定めて当に地獄に墮つべきが故に。是の人は地獄の陰界諸人無しと雖も、猶故名づけて地獄人と為すことを得。善男子よ、是の故に我れは諸の経説中に

於いて、若し人の善を修行する者有るを見れば、天人を見ると名づけ、悪を修行する者ならば、地獄を見ると名づく。何を以ての故ぞ。定めて報いを受くるが故に、と説く。善男子よ、一切衆生は定めて阿耨多羅三藐三菩提を得るが故に、是の故に我れは一切衆生悉有仏性と説く。一切衆生は眞実には未だ三十二相八十種好有らざるなり。

仏とは仏性に他ならない、なぜなら仏性つまり「仏の仏たる所以」である。「三十二相八十種好」なくしては、仏は仏たり得ないからである。では衆生は仏道修行する必要はないのではないか、というところではない。現実には衆生は未だ仏の相好を具えてはいない、しかし必ず菩提を得て仏と成るから、その可能性に於いて「一切衆生悉有仏性」と言ったのである。横超氏も同じ事を言おうとしているのである。

すなわち現在には未だ仏ではないが、将来にはきつと仏となることが可能であるという点で悉有仏性といったのに過ぎぬから、(悉有)仏性というのはつまり仏になる可能性(に於いて)という意味を出ない。

一切衆生悉有仏性というのは、将来必ず仏に成るという可能性に於いて言われているに過ぎない、と言っているのである。ところが「悉有」という言葉を端折ってしまったから、「仏性とは仏になる可能性に過ぎない」というように誤解されることになったのではないか。仏性とは「仏になる可能性」であるとか「成仏の可能性」であるというようなことは、涅槃経のどこにも述べられていないのである。

二

若し仏性無くんば、諸の苦を厭うことをも得ず、涅槃の樂をも求めず、亦た欲せず願わざらん。

buddha-dhātuh sa cen na syān nirvid dukkhe'pi no bhavet,

nēcchā na prārthanā nāpi pranīdhir nirvṛtau bhavet. (I—40)

この偈を述べたあと、宝性論は続ける(大31—183—1a)。

故に勝鬘經に言う、世尊よ、もしも如来藏が存在しないならば、苦を厭うことも存在しないでしょうし、涅槃を求め欲し願うことも存在しないでしょう、と。それについて略説するならば、仏性を清淨にする種姓は邪定聚の衆生に於いてさえ二種の業(仕事)を行ってゐるのである。つまり輪廻に対して、苦惱を見せることによって厭氣を起させ、涅槃に対して、寂樂を見せることによって願心を生じさせるのである。

tathā cōktam. tathāgata-garbhāś ced bhagavan na syān na syād duḥke'pi nirvin na nirvāna icchā vā prārthanā vā pranīdhir vēti. tatra samāsato buddha-dhātu-viśuddhi-gotrām mithyātvaniyatānām api satvānām divīdha-kārya-pratyupasthāpanam bhavati. samsāre ca duḥkha-dōśadarśana-niḥśrayeṇa nirvidam utpādayati. nirvāṇe sukhānuśamsa-darśana-niḥśrayeṇa cchandam janayati. (p.36)

仏性は如来の三種実体 (tri-vidha-svabhāva) から成るべし。如来の三種実体とは

如来の法身 (tathāgata-dharma-kāya)

如来の眞如 (tathāgata-tathatā)

如来の種姓 (tathāgata-gotra)

のことで宝性論の創唱である(一八二八b、梵本p.26)。

宝性論は、十個の観点から仏性とは何かを説明する。

十種の義(性状)によつて、第一義実智の領域である如来性を定立するものが知らるべきである。

samāsato dāsavidham artham abhisamdhāya parama-tattva-jñāna-viśayasya tathāgata-dhātor
vyavasthānam anugantavyam. (p.26)

その最初に上げられるのが実体であり、

常に自性として不染汚であること、清浄な宝珠や虚空や浄水のようにである。

sadā prakṛty-asamkṛṣṭāḥ śuddha-ratnāmbarambuvat. (I—30ab)

と言われ、敷衍して

自在力と不変性と柔軟性とを実体とするから、これら（如来の法身・眞如・種姓）に対して、如意宝珠と虚空と浄水との持つ美徳の点で等しいものである。

ここに前述したこれら三者、その三者に対して順次に、自相共相に照らして、如来性は、如意宝珠と虚空と浄水との持つ清浄の美徳の点で等しいものであると知らねばならない。

prabhāvānanyathā-bhāva-sniḡḍha-bhāva-svabhāvataḥ

cintāmani-nabho-vāri-guṇa-sādharmyam esu hi. (I—31)

ya eḥe trayo'ra pūrvam uddiṣṭā esu trisu yathāsamkhyam eva sva-lakṣaṇam sāmānya-lakṣaṇam cārabhya
tathāgata-dhātoś cintāmaninabho-vāri-visuddhi-guṇa-sādharmyam veditavyam. (p.27)

と言われる。つまり仏性の実体である自在力は如来の法身の自在力に等しく、不変性は眞如の不変性に等しく、柔軟性は種姓の柔軟性（大悲のはたらきに等しい）というのである。かくして仏性の実体は如来の法身、如来の眞如、如来の種姓に他ならないというのである。さらに、三種実体とは別個に如来が存在する道理はないから、前節で引用した涅槃經の經文に「仏なる者は即ち是れ仏性なり」と言い、別に「仏性は即ち是れ如来なり」（大12—四四五c）と言うように、仏性とは諸仏如来そのものに他ならない。したがって、仏性のなす業とは、とりもなおさず諸仏如来のなす業であるということになる。

しかるに仏性の業は、如来蔵と呼ばれる状態に於いて行われる。もっぱら衆生を対象とするからである。

如来蔵の教説をはじめて唱えたのが如来蔵経であることは、周知のところである。涅槃経の一切衆生悉有仏性の説も、この教説を踏まえて主張されたものらしい。卷七(大12—四〇四c)、泥洹経卷四(一八八一b)。西藏語訳による(北京版大蔵経31冊一八五頁五葉六行)。

またここに或る比丘が、偉大な如来蔵経に拠って説く、一切衆生には仏性があり、その仏性は各々の身中に満ちていて、一切衆生はあらゆる煩惱を断尽し了って作仏するが、一闍提は除く、と。

如来蔵経には「一切衆生有如来蔵 (sarva-sattvas tathāgata-garbhaḥ)」(宝性論所引)と言う。仏性思想は別に発達したものであるが、ある時期に、一切衆生有如来蔵の教説を根拠にして、悉有仏性説が唱えられたことを右の経文は示すであろう。宝性論は、両者を総合して体系化するのである。

まず一切衆生有如来蔵の理由を、仏性の三種実体を媒介として説明するところに、その立場を見て取ることができ

る。

要するに三つの理由によって、一切時に一切衆生に如来蔵有りと世尊によって説かれた。つまり、一切衆生に於いて、如来の法身が遍満しているという理由によって、如来の眞如が無差別であるという理由によって、如来の種性が存在するという理由によってである。(八二八b)

samāsatas trividhenārthena sadā sarva-sattvās tathāgata-garbhā ity uktam bhagavatā. yaduta
sarva-sattveṣu tathāgata-dharma-kāya-parispharanārthena tathāgata-tathatāvayvābhedārthena
tathāgata-goṭra-sambhavārthena ca. (p.26)

(このことは後に詳説される。)

如来の法身が、余す所のない衆生界に遍満しているという理由に照らして、これら一切衆生が如来の所蔵である

と説明されている。なぜならば、如来の法身の外にある如何なる衆生も、衆生界には存在しないからである。(八

三八c)

tathāgata-dharma-kāyena niravaśesa-sattva-dhātu-parispharanārtham adhikṛtya tathāgatasyēme garbhāḥ sarva-sattvā itī paridīpitam. na hi sa kaścit sattvah sattva-dhātāu samvidyate yas tathāgata-dharma-kayād bahiḥ. (p.70)

これは仏性論に言うところの所摂藏である。一切衆生は所摂藏としての如来藏を有するのである。

眞如が無差別であるという理由に照らして、如来の眞如がこれら一切衆生の所藏であると説明されている。(八三
八c)

tathātvayatiḥedartham adhikṛtya tathāgata-tathatāisām garbhah sarva-sattvanām itī paridīpitam. (p.71)

これは仏性論に言うところの隱覆藏である。一切衆生は隱覆藏としての如来藏を有するのである。

法身が如来であることは自明の理であるから、法身が衆生を蔵する、法身―蔵が如来―蔵であることは言うまでもないであろう。しかし衆生が眞如を蔵する、眞如―蔵がなぜ如来―蔵なのか、これは説明を要することである。そこで大乘莊嚴經論の頌が引用される。

眞如は一切衆生に於いて無差別であつて、清浄さに到来したものが如来の名義を得る。それゆえ一切衆生は如来藏である。

sarveśam aviśiṣṭāpi tathatā śuddhim āgatā,

tathāgatavain tasmāc ca tad-garbhāḥ sarva-dehinah. (p.71)

眞如とは自性清浄心のことであるが、衆生に於いては客塵煩惱に覆われて汚れている。しかしそれが清浄になって本来の姿に立ち返った時、如来と呼ばれる。したがって眞如を蔵する衆生を、本来性の立場から如来藏と言ったのである。

三種仏身を生む種姓が存在するという理由に照らして、如来性がこれら一切衆生の所蔵であると説明されている。
(八三九 a)

trividha-buddha-kayôpatti-gotra-sambhavârtham adhikritya tathāgata-dhātur eṣāṃ garbhah sarva-sattvānāṃ iti paridīpitam. (p.72)

これは仏性論に言うところの能摂蔵である。一切衆生は能摂蔵としての如来蔵を有するのである。

ここでもなぜ種姓―蔵が如来―蔵であるかの説明が必要なわけであるが、本題について述べる文章中に於いて、種姓 (*gotra*) の代わりに如来性 (*tathāgata-dhātu*) の語を持つて来ることによつて、それを行つてゐるのである。つまり種姓―蔵とは如来性―蔵であるから如来―蔵―如来性は如来に他ならない――なのだと言つてゐるのである。

なぜならば、如来の名義は三種仏身を抛り所として立てられるからである。

trividha-buddha-kāya-prabhāvitatvam hi tathāgatatvam. (ibid)

一切衆生有如來藏品の冒頭の本頌に次のように言われていた。

衆生聚が仏智の中に入つてゐるから、それ (衆生聚) が本来性として無垢清浄であることは諸仏と不二であるから、仏陀の種姓に於いてそれ (衆生聚) の果 (三種仏身) を立てるから、一切衆生に如来蔵有りと言かれてゐる。

buddha-jñāntaragamāu satva-rāśes tan-nairnalyasyādvayavāt prakṛtyā,

bauddhe gotre tat-phalasyôpacārād uktāḥ sarve dehino buddha-garbhāḥ. (I—27)

如来の法身・眞如・種姓を媒介として、一切衆生に如来蔵有りということ説き起こしたものであるが、いま問題の種姓については、如来の名の抛り所となる三種仏身がすでに約束されている。つまり種姓は血統・血筋であるから、王家の血筋を引くものが王たることを保證されているように、如来の血筋を引く一切衆生は、如来たることを保證されてゐる。したがつて種姓―蔵ということが如来蔵であり得るのである。一切衆生に、

三種仏身を生む種姓が存在するという理由に照らして、如来がこれら一切衆生の所蔵であると説明されている。なぜならば、如来の名義は三種仏身を抛り所として立てられるからである。だから如来性はそれを得るための因であるから、この場合には、性の意味は因の意味である。

atas tat-prāptaye hetu tathāgata-dhātur iti hetv-artho'tra dhātv-arthah. (p.72)

衆生が三身仏身を得るため、という点に限定して見るならば、如来性つまり仏性は因である。したがってこの場合に限っては、〈dhātu〉という語の意味は「界」や「性」ではなくて「因」〈hetu〉の意味になる。実はこれが仏性のなす業の動力なのである。

三

宝性論は、七つの修得すべき事柄、七種証義 (sapta-prakāro dhigamārtah) を骨子として構成されている。七種証義とは、

- | | | |
|--------|-------------|----------|
| 一、 仏義 | buddhārtha | |
| 二、 法義 | dharmārtha | } 三宝 |
| 三、 僧義 | saṅghārtha | |
| 四、 衆生義 | dhātv-arthā | } 三宝生起の因 |
| 五、 菩提義 | bodhy-arthā | |
| 六、 功德義 | guṇārtha | } 三宝成就の因 |
| 七、 業義 | karmārtha | |

である(八二一a)。簡単に言えば、三宝(一、二、三)とそれを存続させる因(四)と縁(五、六、七)とについて論じるのである。

これら三種の根本字句によっては、順次に三宝が次第に生起し成就することを説くと知らねばならない。残りの四句によつては、三宝の生起に相応する因と、成就に相応する因とを説くと知らねばならない。(八二一b)

ebhis tribhir mūlapadar yathākramam trāyānam ratnānam anupūra-samutpāda-samudāgama-vyavasthānam vedītyam. avasiṣṭāni catvāri padāni tiratnōpatty-anurūpa-hetu-samudāgama-nirdeśo vedītyah. (p.3)

これは七種証義の教証となる経文——七種金剛句 (sapta-vajra-padani) を引いて解説し、簡潔に論の構成を示したものである。

三宝の教示のあとに、それが有る時のみ、世間出世間の清淨の生所である三宝が生まれるところのそれ、に於いての頌、

有垢眞如と無垢眞如と離垢した仏功德と仏業とは、

第一義諦を見る諸仏の領域であつてそれから清淨な三宝が生まれ出る。

この頌によつて何が明らかにされているか。

この三宝の種姓は一切を見る諸仏の領域であり、

またそれは四種であるが順次に四つの原因によつて不可思議である。

そのうち有垢眞如とは、如来蔵と呼ばれるところの、煩惱のくらを離脱していない仏性のことである。無垢眞如とは、如来法身と呼ばれるところの、仏地中に於ける転依の相を持つその同じ仏性のことである。離垢した仏功德とは、その同じ転依の相を持つ如来法身中の、十力等の出世間の仏法のことである。仏業とは、その同じ十力

等の仏法の自然な無上の業のごとく、この業は休止せず、終わることもなく、止息せず、菩薩に授記することを中心しなす。(八二六c以下)

ratna-traya-nirdesānantaram yasmin saty eva laukika-lokōttara-viśuddhi-yoni-ratna-trayam utpadyate tad adhikṛtya salokh.

samalā tathatātha nirmalā buddha-guṇā jina-kriyā,

viśayaḥ paramārtha-darśinām śubha-ratna-traya-sargako yataḥ. (I—23)

anena kin paridīpitam.

gotraṁ ratna-trayasyāsya viśayaḥ sarva-darśinām,

catur-vidhaḥ sa cācintyaś catarbhiḥ kāraṇaiḥ kramāt. (I—24)

tatra samalā tathatā yo dhātur avinirmukta-kleśa-kośas tathāgata-garba ity ucyate. nirmalā tathatā sa eva buddha-bhūmav āśraya-parivṛtti-lakṣaṇo yas tathāgagata-dharma-kāya ity ucyate. vimalābuddha-guṇā ye tasminn evāśraya-parivṛtti-lakṣaṇe tathāgata-dharmakāye lokōttarā daśa-balādayo buddha-dharmāḥ. jina-kriyā teṣām eva daśa-balādinām buddha-dharmānām pratisvām anuttaram karmā vad anīṭhitam aviratam apratiprāśabdham bodhisattva-vyākaraṇa-kathām nōpacchinatti. (p.21)

衆生が三種仏身を得て作仏する、つまり如来あるいは仏の名義 (tathāgatatva, buddhatva) を得る、そのため因がとりもなおさず三宝出生の因——三宝の種姓 (宝性-ratna-gotra) ——でもめるのは、三宝が仏宝に始まるからである。

衆生は一処に帰す、仏の法身なる彼岸に。仏身に依りて法有り、法に依りて僧を究竟す。(八二六b)

jagac-charanam ekatra buddhatvaṁ pāramārthikam,

muner dharmasāritvat tan-nisthatvād ganasya ca. (I—21)

この因としての仏性、つまり仏性のなす業の動力として働く仏性の機能が、四つの側面に於いて把えられ、その果たす役割によって正因と縁因とに分けられる。

- | | |
|--------------|------|
| 1 如来蔵(有垢眞如) | — 正因 |
| 2 如来法身(無垢眞如) | |
| 3 仏功德 | } 縁因 |
| 4 仏業 | |

この四種法が、前に挙げた七つの所証義のうち、後の四つに相当することは言うまでもないが、観点が移ることによってまた種々の名を得る。まず衆生が三種仏身を得て作仏するということは、菩提を覚するということに他ならないので、それを中心にして考えると、四種法は、

所覚法であり、菩提であり、菩提分であり、令他覚であるから、順番に

それ(如来蔵)の清浄化のための、一の語句の示すものは因であり、三の語句の示すものは縁である。

また、この四つの事柄を示す語句の中、一切の所知を全て含むことに照らして、第一のは所証法を示す語句であると知らねばならない。それを覚ることが菩提であるから、第二のは菩提を示す語句である。菩提の支分をなすのが仏功德であるから、第三のは菩提分を示す語句である。菩提分によってのみ他者をして覚らしめるのであるから、第四のは令他覚を示す語句である。かくして、これら四つの語句に照らして、因縁として、三宝の種姓を定立すると知らねばならない。(僧宝品八二七c以下)

bodhyaṃ bodhis tad-angāni bodhanēti yathākramam,

hetur ekam padam trīni pratyaya tad-viśuddhaye. (I—26)

esām khalv api caturṅgām artha-padānām sarva-jñeya-saṅgraham upādāya prathamam boddhavya-padam
 draṣṭavyam. tad-anubodho bodhir iti dvitīyam bodhi-padam. bodher anga-bhūtā buddha-guṇā iti tritīyam
 bodhy-anga-padam. bodhy-angair eva bodhanam pareṣām iti caturtham bodhanā-padam. itīmāni catvāri
 padāny adhikṛtya hetu-pratyaya-bhāvena ratna-traya-gotra-vyavasthānam vedītavayam. (p.25)

1 所覚法 (bodhya) 一 因

2 菩提 (bodhi)

3 菩提分 (bodhy-anga)

4 令他覚 (bodhana)

} 縁

これが「覚」といふことをめぐって仏性の果たす機能に与えられた四種の名である。「それ(如来蔵)の清浄化のため
 の因縁である」ということについては後回しにして、所覚法が「一切の所知を全て含むことに照らして所証法(boddhavya)
 である」という点を理解するために、少し遡らなければならない。僧宝品の始めに、僧衆について次のように言う。

如実修行と如量修行とによつて、自内証の智による見が清浄であるから、
 智慧ある不退転の僧衆は無上の勝徳と俱にある。(八二四c)

yathāvad-yāvad-adhyātma-jñāna-darśana-suddhitāḥ,

dhimatām avivartyānām anuttara-guṇair gaṇaḥ (I—14)

まず如実修行について、

一切衆生を寂靜な法性に於いて見るから如実であり、またこの見は
 自性が清浄であるゆえに煩惱は本来無いと見ることから生じる。

そのうち如実修行とは、人と法で知られる一切衆生の無我の辺際を如実に見るからであると知らねばならない。

また此の見は、衆生は無始世よりの寂靜を自性としてゐるので、人と法は滅しようがないという道理によつて、つまり二つの原因から生じる。心の自性清淨性を見ることからと、その煩惱の本来滅の滅を見ることからである。(八二四c)

yathāvat tai-jagac-chānta-dharmatāvagamāt sa ca,
prakṛteḥ pariśuddhatvāt kleśasyādi-ksayāksanāt. (I—15)

tatra yathāvad-bhāvīkatā kṛtsnasya pudgala-dharmākhyasya jagato yathāvan nairāmya-koṭer avagamād
vedīavyā. sa cāyam avagamo' tyantādi-śānta-svabhāvatayā pudgala-dharmāvināśa-yogena samāsato
dvābhyān kāraṇābhyān utpadyate. prakṛti-prabhāsvaratā-darśanāc ca citrasyādi-ksaya-nirodha-darśanāc
ca tad-upakleśasya. (p.14)

僧衆が三宝の二に数えられるのは、「自内証の智による見が清淨であるから」である。「智による見」(jñāna-darśana) というのは、いわゆる仏知見の「知見」である。それは如実修行(yathāvad-bhāvīkatā)と如量修行(yāvadbhāvīkatā)とによつて得られる。

そのうち如実修行による知見とは、一切衆生を法性(dharmatā)——羅什の訳語を用いるならば諸法実相——に於いて見ること、つまり心の自性は清淨である(prakṛti-prabhāsvaratā)と見ることであり(心性本淨)、煩惱は本来無(adīksaya-nirodha)であることと見ることである(客塵煩惱)。「人と法は滅しようがないという道理」というのは、仏性論に「此の人の法の二執に由りて其の心を染汚す」(巻四、大31—八二二a)と云うところの人の法(pudgala-dharma)は、無始世来空であつて、あらためて滅しようがない、つまり本来無であるという道理である。

次に、如量修行(yāvadbhāvīkatā)——漢訳は遍修行、如量は眞諦の訳語——について、
如量修行とは、所知の辺際にまで達する知によつて、

一切衆生中に一切智者の法性が有ることを見るからである。

そのうち如量修行とは、一切の所知の事の辺際にまで達する出世間の智慧によって、一切衆生中に果ては畜生趣中にまで如来蔵が有ることを見るからである。と知らねばならない。またその見は正に菩薩の初の菩薩地に於いて生じるが、遍行の意味において（如量に、遍く）法界を見るからである。（八二五 a）

yāvad-bhāvīkatā jñeya-paryanta-gatayā dhīyā,

sarva-sattveṣu sarvajña-dharmatāsītva-darśanāt. (I—16)

tatra yāvad-bhāvīkatā sarva-jñeya-vastu-paryanta-gatayā lokōttarayā prajñayā sarva-sattveṣv antaśas
tiyag-yoni-gateṣv api tathāgata-garbhāṣṭīva-darśanād vedītyā. tac ca darśanam bodhisattvasaya
prathamāyām eva bodhisattva-bhūmāv utpadyate sarvatragārthena dharmadhātu-prativedhāt. (p.15)

如量修行による知見とは如実修行が一切衆生を法性に於て見ることであったのに対して、一切衆生の法性(dharmatā)を見ることである。すなわち「所知の辺際にまで達する知」つまり一切智によって、一切衆生中に「一切智者」(sarvajña)つまり諸仏如来の「法性」が有ることを見ることである。「一切智者の法性」(sarvajña-dharmatā)は続く文章中では「如来蔵」(tathāgata-garbhā)と言ひ換えられ、法界(dharma-dhātu)と置き換えられている。

いま問題なのは、所覚法(bodhya)であるところの如来蔵が、「一切の所知を全く含む」ことに照らして所証法(boddhavya)である」と言われるのは何故か、ということであった。

衆生が三種仏身を得て作仏することは、仏智である一切智を得ることに他ならないが、それは右に見るように如実修行と如量修行とによって達成される。「一切の所知」(sarva-jñeya)というのは、まさにこの一切智の対象となる一切に他ならない。それを「全て含む」(saṅgraha)のであるから、如来蔵は能覚の一切智に対応する所覚の法であり所証の法なわけである。つまり衆生が仏の菩提を得るために覚らなければならない当体なのである。それはまた「一

切の所知を全て含む」のであるから法界とも言われる。仏性論に、

初地に至りて、菩薩は此の二智（如実智と如量智）を得、遍滿法界に通達するを以ての故に、生死涅槃の二法俱に知る。（卷三、大31—八〇二b）

と言う。

宝性論が涅槃經の見性成仏説を承けていることは、

十地に住する菩薩たちが如来蔵を少分見る、と説かれている。

daśa-bhūmi-sthita bodhisattvās tathāgata-garbhān iśat paśyanti uktam. (p.77)

十住菩薩、於如来性、知見少分。（涅槃經卷八、大12—四二二a）

とする引用のあることから確かめ得るであろう。

四

一切衆生を法性に於いて見ること、一切衆生の法性を見ることは別事ではない。一切智つまり出世間智である無分別智によって、如実に法性を見ることである。しかるに法性とは如来蔵仏性のことであったから、これは見性に他ならず、菩薩地の初地に於いて起こると言われている。

ここで、後回しにしておいた四種法が「それ（如来蔵）の清浄化のための因縁である」ということについて考えてみなければならぬ。「如来蔵の清浄化」とは、前引の文中に言う「有垢眞如」つまり「煩惱のくらを離脱していない」仏性が、「無垢眞如」つまり「如来法身と呼ばれるところの仏地中に於ける転依の相を持つ」仏性になることである。簡単に言えば、如来蔵が転依して（*āśraya-parivṛti*）して清浄法身となることである。そのためのなかんづく所覺の法

は正因であるとされていた。

そのうちこの四つの語句の中の初の（如来蔵）は出世間法の種子であるから、内身の如理作意によってそれ（如来蔵）が清浄になることに照らして、三宝出生の因であると承知しなければならぬ。かくして一の語句は因である。如何ようにして三は縁であるか。如来が無上正等覚を現等覚して、十力等の仏法によって三十二種の如来業を為しつつあるとき、他からの音声によってそれ（如来蔵）が清浄になることに照らして、三宝出生の縁であると承知しなければならぬ。かくして三は縁である。

tatāisān caturān padānān prathamān lokōtara-dharma-bijātvāt pratyātma-yonišo-manasi-kāra-samniśrayena tad-viśuddhim upādāya tri-ratnōpatti-hetur anugantavyah. iṅ evam ekam padam hetuh. katham trīni pratyayah. tathāgato'nuttarān samyak-sambodim abhisambudhya daśa-balātibhir buddha-dharmair dvātrimsād-ākāraṅ tathāgata-karma kurvan parato ghoṣa-samniśrayena tad-viśuddhim upādāya tri-ratnōpatti-pratyayo'nugantavyah. iṅ evam trīni pratyayah. (p.25)

衆生は三種仏身を得て作仏するとされるのであるが、三種仏身については、

このうち初めのは法身であって後の両者は色身であるが、色かたちあるものが虚空中に存在するように、後の両者は初の法身中に存在する。（八四三二b）

prathamō dharmā-kāyo'tra rūpa-kāyau tu paścīmanau,

vyomni rūpa-gatasyēva prathamēnītyasya vartanam. (II—61)

と言われるから、他の二身は法身に帰することを念頭に置いておかねばならない。

つまり衆生が仏身を得るとは法身を得ることである。そのために仏性は因となるのであるが、その機能に四つの側面があることは前に見たところである。いま三種実体をも含めて図式にすると次のようである。

種姓	所覚法—如来蔵	法身(自在)
(仏性)	菩提—如来法身	種姓(大悲)
	令他覚—仏業	

このうち所覚法 (bodhya) である仏性を覚ることが見性に他ならない。しかるに所覚法を覚ることは、同時にいわゆる在纏の法身である

世尊よ、正に同じこの、煩惱のくちを離脱していない如来法身が如来蔵であると言われている。(八二四 a)

ayam eva ca bhagavanis tathāgata-dharma-kāyo vimuktā-kleśa-kośas tathāgata-garbhāṅ śūcyate. (p.12)

如来蔵が転依して清浄法身となることでもある。見性が転依であるとはどういふことであろうか。

「清浄」といふことについて、

清浄が転依の実体 (svabhāva) であると言われたその場合、清浄は要するに二種であり、自性清浄と離垢清浄とである。そのうち自性清浄とは性解脱であって離繫ではない。自性清浄心は客塵垢を離繫しないからである。離垢清浄とは得解脱であって離繫である。水等が塵垢等からするように、自性清浄心が客塵垢から残りなく離繫するからである。(八四—b)

yad uktam āśraya-parivṛtṭeh svabhāvo viśuddhir iti tatra viśuddhiḥ samāsato dvi-vidhā. prakṛti-viśuddhir vaimalya-viśuddhiś ca. tatra prakṛti-viśuddhir yā vimuktir na ca visamnyogah prabhāsvarāyās citta-prakṛter āgantuka-malāvīsamnyogāt. vaimalya-viśuddhir vimuktir visamnyogāś ca vāry-ādīnān iya rajo-malādibhyah prabhāsvarāyās citta-prakṛter anavasāsam āgantuka-malebhyo visamnyogāt. (p.80)

漢訳は「自性清浄心は客塵垢を離繋しないからである」という語のあとに「彼(客塵煩惱)は本来相応せざるを以ての故に」という句を補っている。これは如実修行のところに言う客塵煩惱は本来無(*adi-kṣaya-nirodha*)であるから滅しようがないという道理であって、心性本浄説の基本的な立場である。

そもそも如来法身は、

ただ如来法身のみが常波羅蜜であり、楽波羅蜜であり、我波羅蜜であり、浄波羅蜜である、と勝鬘經に言われる。
(八三〇c)

tathāgata-dharmakāya eva nitya-pāramitā sukha-pāramitātmā-pāramitā śubhāpāramitēty uktam. (p.34)

とあるように、煩惱とは一切無縁である。見られる側が煩惱と一切無縁であるならば、煩惱は見る側にかかわるといなければならない。前に見たように、僧衆が三宝の二に数えられるのは、「如実修行と如量修行とによって、自内証の智による見が清浄であるから」(*yathāvad-yāvād-adhyātma-jñāna-darśana-suddhitā*)であった。清浄になるのは修行者の見(*darśana*)なのである。より解りやすくするために言葉の遊びを利用するならば、修行者の眼(*darśana*)が清浄になるのである。

またその見は、要するに二つの理由によって、他の限られた智による見にくらべて勝れて清浄であると言われる。どんな二つの理由によるのか。無著であるからと無碍であるからとである。そのうち如実修行によって衆生の界が自性清浄であることを対象として見るから無著であり、如量修行によって無辺の所知の事を対象として見るから無碍である。(八二五a)

tac ca samāsato dvābhyāṃ kāraṇābhyāṃ itara-prādeśika-jñāna-darśanam upanidhāya suviśuddhir ity ucyate. katamābhyāṃ dvābhyāṃ. asaṅgatvād apratihata tvāc ca. tatra yathāvad-bhāvikatayā satva-dhātuprakti-viśuddha-viśayatvād asaṅgam yāvad-bhāvikatayānanta-jñeya-vastu-viśayatvād apratihataṃ. (p.16)

無著 (asaṅga) とは煩惱障から離脱していることとあり、無碍 (apratihata) とは所知障から離脱していることとあり、これが清浄ということの意味である。

習気と共に煩惱障と所知障とから解脱することによって、無障碍の清浄法身を獲得することが自利の成就と言われる。(八四一c)

yā savāsana-kleśa-jñeyāvarana-vimokṣād anāvaraṇa-dharma-kāya-prāptiḥ iyaṁ ucyate svārtha-sampattiḥ. (p.81)

此の苦滅と呼ばれる如来法身を獲得する因は、見道と修道中の無分別智である。(八二四a)

asya khalu duḥkha-nirodha-samjñitasya tathāgata-dharma-kāyasya prāptiḥ hetuḥ avikalpajñāna-darśana-bhāvanā-mārgaḥ. (p.12)

この節の始めに引いた文章が、見性が転依であるとはどういうことかという当面の課題を提起したのであるが、その文中の「如理作意」(yoniso-manasi-kara) というのは無分別智に他ならぬ。

業と煩惱とを引き起こす因である非如理作意が分別である。(八二四a)

vikalpa ucyate karma-kleśa-samudaya-hetuḥ ayoniso-manasi-karaḥ. (p.12)

と言われるからである。この無分別智は、「集仏智因 (budda-jñāna-samudāgama-hetu)」(八三二b) である「般若三昧門の修習 (prajñā-samadhi-mukha-bhāvanā)」つまり如実修行、如量修行によって得られるもので、見性もこれによる。しかし修習がどこまで進めば得られるという目安が立つわけではない。禅の語録に忽然大悟という言葉があるように、むしろ突然の見性によってその存在が気付かれるといったものであると考えられる。見性とは、清浄な眼で一切智者の法性つまり「無障碍の清浄法身」(anāvaraṇa-dharma-kāya) を見ることである。しかるに教理上は、それを無分別智が法身という果を獲得することとする。

二種の、出世間の無分別智とその後得智とが、離繫果と名づけられる転依（清淨法身）の因である。（八四一c）
yat tu dvi-vidham lokōttaram avikalpam tat-pr.ṣṭha-tadbham ca jñānam āśraya-parivṛtter hetur visamyo-ga-phala-samjñitāyāh. (p.82)

前の文中の「出世間法」(lokōttara-dharma)というのは四種法中の如来法身とそれに属する仏功德とを指す。法身種子という考えが撰大乘論にもあることは周知のところである。所覚法としての仏性は、種子(bīja)として法身を与えるのである。故に衆生が作仏するための、つまり三宝出生の正因なのである。この法身が、仏性の三種実体の一である法身であることは言うまでもないであろう。

また四種法中の菩提はその法身の覚である。菩提がなければ菩提分すなわち仏功德はあり得ない。仏功德がなければ仏業は為し得ない。したがって、常に仏業を為しつづける仏性に菩提が欠ける道理はないのである。仏性はすでに作仏しているのである。いわゆる久遠実成である。

有と輪廻とに於いてその苦と楽の災患と功德を觀ることは

種姓が有る時に存在するのであって、無種姓の者には存在しない。

淨分を有する人が、輪廻に於いて苦の災患を見るのも、涅槃に於いて楽の恩恵を見るのも種姓が有る時に存在するのは、無因無縁ではないからである。何故ならば、もしその見が種姓を外にして、無因無縁で、悪を断たないまま存在するならば、その見は無涅槃性の一闡提にも存在するであろう。しかし客塵煩惱の垢を清淨にする種姓が、善知識に親近するなどの四種聖輪を修習することを通して、三乗のいずれかの法への信解を起こさない限り存在しないのである。（八三一a）

bhava-nirvāna-tad-duḥkha-sukha-dosa-guṇēksanam,

gotre sati bhavaty etad agotrānam na vidyate. (I—41)

yad api tat sansāre ca duhkha-doṣa-darśanaṁ bhavati nirvāṇe ca sukhānuśaṁsa-darśanam etad api śuklāṁśasya pudgalasya gotre sati bhavati nāhetukam nāpratyayam iti. yadi hi tad gotram antareṇa syād ahetukam apratyayam pāpāsamuccheda-yogena tad icchantikānām apy aparinirvāṇa-gotrāṇām syāt. na ca bhavati tāvad yāvad āgantuka-mala-viśuddhi-gotraṁ trayāṇām anyatama-dharmādhimuktim na samudānāyati satpurusa-samsargādi-catuh-cakra-samavadhāna-yogena. (p.36)

仏性の為す業はまず信解 (adhimukti) を起すことからはまる。仏性は所覚法として前面に現れる一方、背後からあつ押しをするのである。これが「一切衆生有如來藏」「一切衆生悉有仏性」の意味である。

さて此の如來藏は法身と別ではなく、真如と同じ相を持ち、決定種性を自体として、一切時と一切所に於いて、余す所のないあり方で衆生界にあると、法性を基準として見なければならぬ。如來藏經に謂く、善男子よ、常にこれ等一切衆生に如來藏が有るといふことは、如來が出世しようとして出世しまいと、一切法の法性である。(八九〇)

sa khalv eṣa tathāgata-garbhō dharmakāyāvīpralambhas tathatāsanibhinna-laksano niyata-gotra-svabhāvaḥ sarvadā ca sarvatra ca niravaśeṣa-yogena sattva-dhātav itī draṣṭavyaṁ dharmatāṁ pramāṇī-krīya. yathōktam. eṣā kula-putra dharmāṇāṁ dharmatā. utpādād vā tathāgatānām anutpādād vā sadāivāite sattvās tathāgata-garbhā itī. (p.73)

「法性」(dharmatā) は「正智のよみであるはずであり、正智のよみでないはずはない」(evam eva tat syāt, anyathā nāiva tat syād itī) 道理 (yukti) であるを説明される。「自然法爾」といふ言葉と置き換えることもできる。

法性は思議すべからず、分別すべからず、信解すべし。

sā na cintayitavyā na vikalpayitavyādhimokṣavyā. (p.73)

これが宝性論の基本的な立場である。

註

① 仏性論に言う「能摂を蔵と為すとは、謂く、果地の一切の、恒沙の数に過ぎたる功德は、如来応得性に住する時、これを摂して已に尽くすが故なり。若し果時に至りて、方めて性を得と言わば、此の性は便ち是れ無常なり。何を以ての故ぞ。始得なるには非ざるが故なり。故に本有なることを知る。是の故に常なりと言ふ」(大31—七九六a)。

② 撰大乘論本上(大31—一三六c)。長尾雅人『撰大乘論』——和訳と注解——上(昭和五十七年、講談社)二二八頁の解説を参照。